

琉球大学学術リポジトリ

《研究総論》 21世紀型思考力の育成（3年次）： アクティブ・ラーニングを通して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属中学校 公開日: 2020-06-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 謙太, 里井, 洋一, 與那覇, 直樹, 門口, 安光, 新垣, 真, 前原, 大和, 田港, 朝也, 上原, 明子, 比嘉, 司, 玉城, 健一, 神谷, 千恵子, 新垣, 元子, 道田, 泰司, 上江洲, 朝男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/45999

21 世紀型思考力の育成（3 年次）

－アクティブ・ラーニングを通して－

中村謙太* 里井洋一** 與那覇直樹* 門口安光* 新垣真* 前原大知* 田港朝也*
上原明子* 比嘉司* 玉城健一* 神谷千恵子* 新垣元子* 道田泰司** 上江洲朝男**

*琉球大学教育学部附属中学校 **琉球大学教育学部

I はじめに

昔から人間は困難に出会った時、その問題の本質を考え、解決に向けて知識を集め、知恵に変えながら乗り越えてきた。沖縄では、そのような知恵のことを“ジンブン”と称し、尊重してきた風土がある。その知恵（ジンブン）ある人間が、予測困難なこれからの社会の中で、弛まない発展を支える人材になり得るであろう。「社会の形や働き方などが大きく変化していく中で、子どもは解き方があらかじめ定まった問題を効率的に解いたり、定められた手続きを効率的にこなしたりするような^①知識の習得だけではジンブンは得られない。ジンブンの獲得には、子ども自身が豊かな人生を創造するために必要な知識をつかみ、試行錯誤しながら使いこなせる資質・能力の育成が必要であろう。そこで、本校では子どもたちが潜在的に持っている学ぶ力を引き出し、それを使いながら知恵（ジンブン）の育成をねらうことで、21世紀を生き抜くために必要な子どもたちの学びを追究することとした。

II 主題設定の理由

1 社会の要請から

「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ（以下「審議のまとめ」）では、急速なグローバル化や情報化が進展する社会の中で、未来の在り方を先取りしながら学校教育のよさを進化させていくべき^②だと指摘している。そこで子どもたちが活躍する未来に向けて、「情報や情報

手段を主体的に選択・活用していくスキルや物事を多角的・多面的に吟味し見定めていく力（クリティカルシンキング）、統計的な分析に基づき判断する力、問題を見いだし解決に向けて思考するための知識やスキル等^③の必要性が大きくなっている。一方、審議のまとめでは「我が国の子どもたちの学力の現状は、学習したことを活用して根拠を明確にしながら自分の考えを述べたり、学習の結果から解釈・考察して説明したりする力には課題がある^④」と指摘している。将来の学校教育の在り方を考えた場合、どんな社会構造にでも立ち向かえる生徒一人ひとりの「思考力」を高める学習指導が求められていると考える。

2 沖縄県の現状から

沖縄県の現状は、「全国学力・学習状況調査結果においては、全ての科目で全国水準との差を縮めている。一方、活用に関するB問題に課題が見られるので、自分の考えを書く、交流活動を通して自分の考えを明確に伝える、振り返りを通して自分の考えを整理するなど、思考力・判断力・表現力等の育成が必要^⑤」とある。石井は、知識を活用したり創造したりする力は、学習者の実力が試される思考しコミュニケーションする必然性のある文脈において、共同的で深い学習に取り組む中でこそ育てられると述べている^⑥。つまり、本県ではA問題で問われた知識・技能を使って考えなくなる状況や、深く思考する必然性のある場面で思考力をはぐくむことが求められる。また、子

どもたちが目的意識をもって学習に臨み、生活環境に左右されずに主体的・能動的な学習につながる指導方法等の工夫・改善も求められる。

3 本校の現状から

本研究初年度の平成 28 年 12 月に全国学習状況調査を本校独自で全校生徒に行った。その結果、質問番号(46)の「話し合い活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思うか」の項目で、87% (H27 年度 3 学年実施比 7% ↑) の生徒が肯定的な反応を示した。一方、質問番号(45)の「他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しい」の項目で、65% (H27 年度 3 学年実施比 8% ↑) の生徒が肯定的な反応を示した。この調査結果から、各教科で実践している対話を通じたアクティブ・ラーニングは生徒の考えを深め・広げる活動に対して効果的だと示唆された。一方、自分の考えたことを自分

の言葉や文章で伝えるなどのアウトプット活動に対して、課題意識があることが分かった。

多難な次代を生き抜く準備をする学び手は、問題の本質やその根拠まで深く追求して納得する経験や、その思考プロセスを内省的に振り返り、学び方を学ぶといった経験を繰り返す事が求められる⁴⁾。つまり、生徒の学習活動が単に学習内容をインプットして終わるだけでなく、問題解決に向けて深く考え、学習内容の本質に迫る経験が重要ということである。その為には、よりよい解決に向けて自己の考えの外化や、他者とともに多面的・多角的に振り返るなどの経験が必要であろう。そこで、本研究は前次研究の対話による協調的な学び合いを背景に主体的・対話的で深い学びの視点を通して、生徒が深く考えることが出来るような授業改善を行い、21 世紀を生き抜くために必要となる思考力（深く考える力）を育成していくこととした（図 1）。

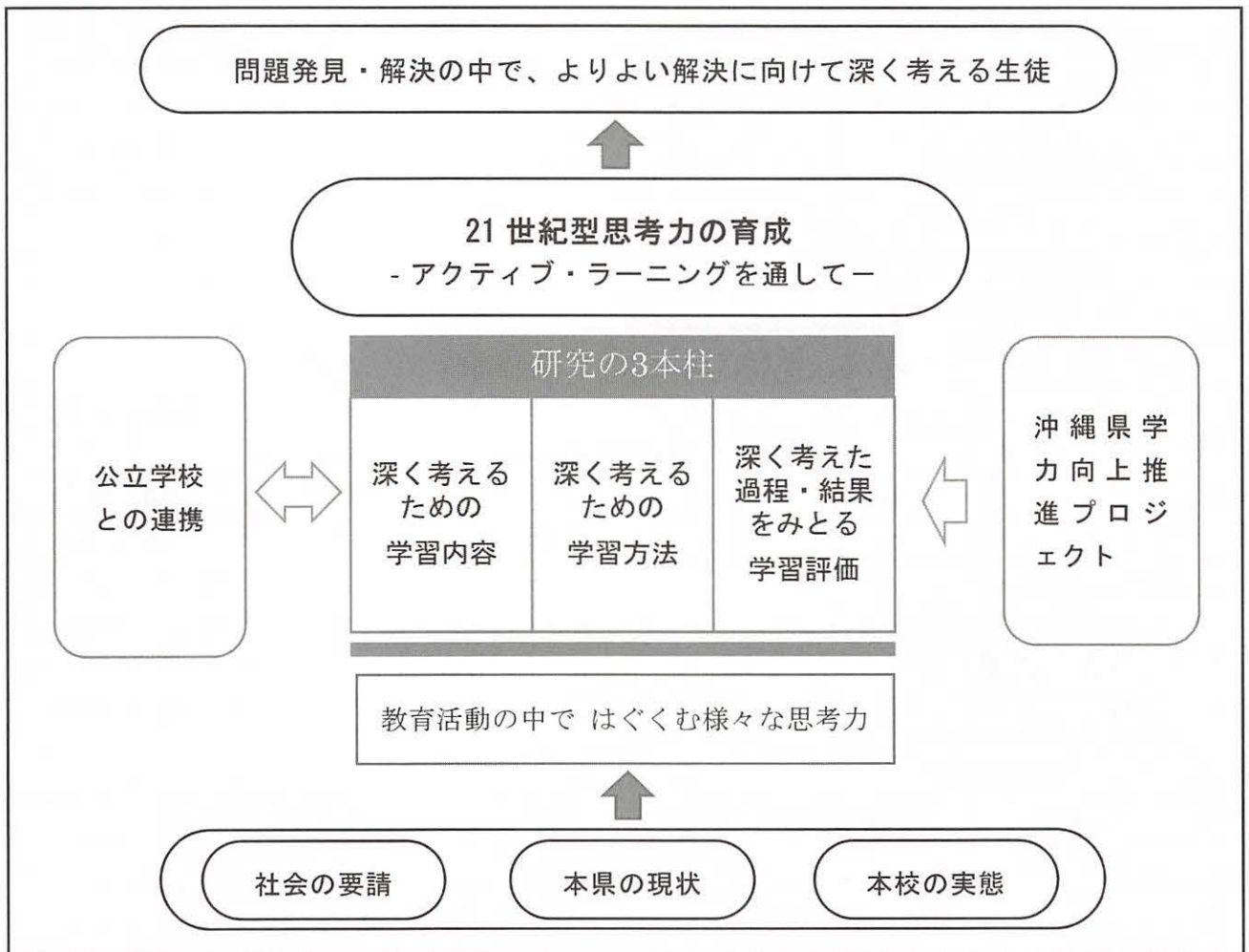


図 1 研究構想図

Ⅲ 研究の目的

21世紀を生き抜くために必要となる思考力を、深く考える学習活動を通して育成する。

Ⅳ 目指す生徒像

問題発見・解決の中で、よりよい解決に向けて深く考えることができる生徒。

Ⅴ 研究内容

1 「21世紀型思考力」とは

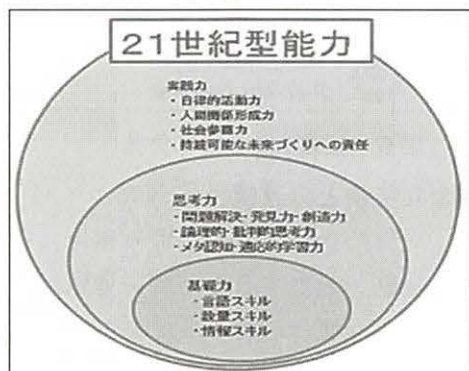


図2. 21世紀型能力

研究主題の「21世紀型思考力」が示すものは、国立教育政策研究所（以下「国研」とする）の掲げる「21世紀型能力（図2）」の中核に位置し、「7つの構成要素からなる思考力」⁴⁾を意図している。国研では、その中核に位置する思考力を「様々な解決に向けて一人一人が自ら学び判断し自分の考えを持って、他者と話し合い、考えを比較吟味して統合し、よりよい解を見いだす力、更に新しい知識を作り出し、次の問いを見つけるような力⁴⁾」と考えている。

本校の捉える「21世紀型思考力」とは、7つの構成要素が互いに関連しながら働いている思考力の様相（図3）を示す。

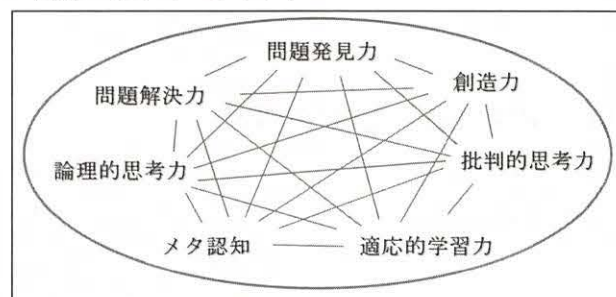


図3 (本校の捉える) 21世紀型思考力

そのような思考力は、生徒が思考しコミュニケーションする活動が自ずと生じる課題や場の中で自然に働いていると考える。そこで、問題発見・解決の中で「深く考える（図4）」生徒の姿やその背景を、丁寧に洞察・分析することで「21世紀型思考力」を育成する手がかりをつかみたい。

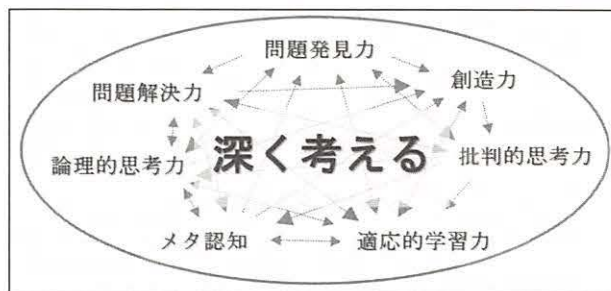


図4 深く考える

2 アクティブ・ラーニングとは

研究の副主題を「一アクティブ・ラーニングを通して」とし、他者と協調的に学び合いながら思考を深める事ができる学習環境（学習者・授業内容・評価・支持的風土 等）を視野に入れ、全教科で「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び（アクティブ・ラーニング）⁶⁾」の実践研究を行うこととした。それを採用した目的は、知識が生きて働くものとして習得されるための学習過程の質的改善⁶⁾を行うことで、それに伴うよりよい思考力が生徒にはぐくまれると考えたからである。そこで、生徒が「深く考える」場を、アクティブ・ラーニングの授業改善の3つの視点（①主体的な学び②対話的な学び③深い学び）からアプローチする。

3 研究の3本の柱

本研究は、「21世紀型思考力」の育成のために、生徒が「深く考える」姿や背景を念頭に取り組む。そこで、次の3つ（図5）を研究の柱とする。

- ①深く考えるための学習内容（指導内容・計画）
- ②深く考えるための学習過程（思考を誘う発問や思考ツールなど）
- ③深く考えた過程や結果をみとるための学習評価

図5 本研究の3つの柱

(1) 深く考えるための学習内容（指導計画）

単位時間の細切れの学習教材は、教えやすく学習しやすい。一方、細切れでは思考を深めるには物足りない場合がある。本研究の目指す生徒像には、生徒が思考しコミュニケーションする活動の持続性や継続性がポイントになってくる。そこで、学習内容と子どもの学びをつなぎ、大きな概念形成に至るような単元構成（指導計画）の工夫を行い、より一層の思考の深まりを考える。生徒の学びがいにも着目する。

(2) 深く考えるための学習方法

新しい知識を獲得するには、生徒の能動的（active）な思考を促しながら、個々の経験や既有知識をつなぐことが必要である。その方略としては、例えば「アフリカ州の魅力は何だろう？（社会科）」「どうして？薬物に手をだしてはダメなのですか？（保健体育科）」などの、単元の中核となる発問から学習を考える。その事で、生徒が自ら知識の再構築を行い、生徒なりの最適解を作り出せるアウトプット活動の必然性がうまれる。また、深く考えるためには、より広い視点や異なった視点が必要である。視点や判断をゆさぶるような教師からの問い直しの重要性についても着目する。

(3) 深く考えた過程や結果をみとる学習評価

石井は、目標となる学力の質に応じてそれに適した方法を工夫していく事で個の学びが評価できる³⁾と述べている。例えば、知識の獲得と定着（知っている・できる）レベルでは、穴埋めや選択などの客観テスト。知識の意味理解と洗練の（わかる）レベルでは、記述や図示など表現を伴う客観テスト。知識の有意味な使用と創造（使える）レベルでは、「パフォーマンス課題に基づく評価」が有効であると述べている³⁾。つまり、深く考えた過程や結果をみとる為には、単元等の学習内容を構造化し、それに適した評価方法やタイミングの工夫を行う必要があるという事である。評価を通して深く考える生徒をめざす「指導と評価の一体化」を念頭に、各教科で評価モデルの作成を進める。

(4) 学力向上推進プロジェクトから

予測困難な時代を見据え、本県では「沖縄県 21 世紀ビジョン」が策定され、目指すべき将来像に

向けて県全体が一体となった取り組みを求めている。県教育界では、「学力向上推進プロジェクト」を立ち上げ、子どもたちが自らの人生を主体的に切り拓いていけるような「確かな学力」の向上を目指している。本校では、地域教育のモデル校として県の掲げる「授業改善 6 つの方策（図 6）」を視野に入れながら本研究の検証を進める。

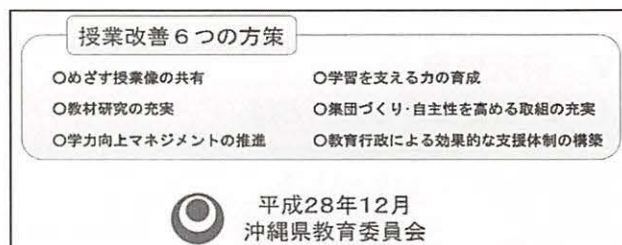
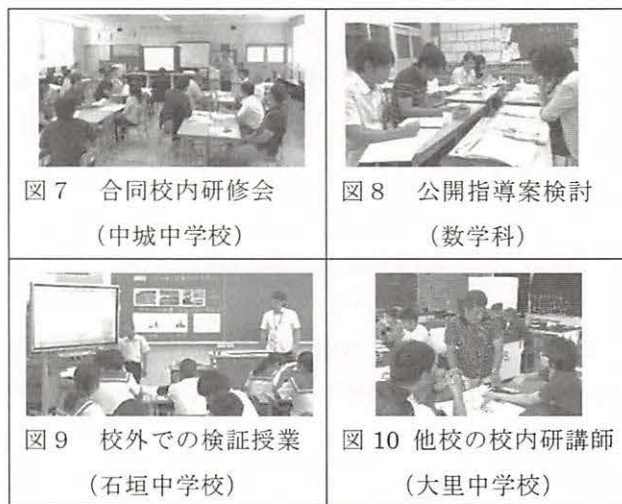


図 6 授業改善 6 つの方策

(5) 地域公立学校との連携

本校は、先行的な指導方法に取り組み、その成果や課題を検証・公表することで、地域教育の振興に資するという使命がある。そこで、今年度は公立学校との夏季校内研修の合同開催（図 7）、公立学校の先生を招いての指導案検討会（図 8）、本校教諭による公立学校での検証授業実施（図 9）、公立学校の校内研修に講師としての参加（図 10）など多様な形で、本校の在り方を模索する。



VI 実践計画・研究の経緯

本研究は 3 年計画のもと、総論及び各教科での理論研究と生徒が深く考える授業づくりを念頭に公開授業や授業実践の試行・省察を繰り返しながら実践研究を進めてきた。本研究の年次別の取り組みの経緯を以下に示す（表 1）。

表1 年次別 研究の取り組み

	主な実践・研修内容
1年次 / 準備期	<ul style="list-style-type: none"> ○授業実践の試行・省察（公開授業 10 教科、教育研究発表会で全教科公開授業） ○各教科論の構築 ○学習評価の模索 ○公立学校との連携（出前授業や校内研修等への職員派遣のべ 20 回、合同研修会 他） <ul style="list-style-type: none"> ・「思考力」についての勉強会（講師：道田泰司琉球大学教職大学院） ・協調学習の理論研究（講師：飯窪真也 東京大学 CoREF、齋藤萌木 東京大学 CoREF） ・講演会「今求められる学力と学びとは」（講師：石井英真 京都大学大学院）
2年次 / 実践期	<ul style="list-style-type: none"> ○授業実践の充実・改善（公開授業全 13 回、教育研究発表会で全教科、道徳で公開授業） ○学習評価の検討 ○公立学校との協働（出前授業や校内研修等への職員派遣のべ 14 回、合同研修会 他） <ul style="list-style-type: none"> ・「思考力」についての勉強会（講師：道田泰司琉球大学教職大学院） ・協調学習の理論研究（講師：飯窪真也 東京大学 CoREF、齋藤萌木 東京大学 CoREF） ・「パフォーマンス評価」についての勉強会（講師：中西修一郎 京都大学大学院生） ・講演会「『資質・能力』を育てるパフォーマンス評価」（講師：西岡加名恵 京都大学大学院）
3年次 / 発展期	<ul style="list-style-type: none"> ○授業実践の充実（公開授業 9 教科、教育研究発表会で全教科、道徳で公開授業） ○学習評価の試行・省察 ○公立学校への普及（出前授業や校内研修等への職員派遣のべ 20 回、合同研修会 他） <ul style="list-style-type: none"> ・「思考力」についての勉強会（講師：道田泰司琉球大学教職大学院） ・協調学習「授業研究」演習（講師：飯窪真也 東京大学 CoREF、齋藤萌木 東京大学 CoREF） ・講演会「『深い学び』に向かう授業研究のあり方」（講師：道田泰司 琉球大学教職大学院、仲松研 沖縄県義務教育課）

(1) 研究 1 年次（平成 28 年度）

研究 1 年次は、研究の準備期と位置づけ、総論及び各教科の理論研究や、各教科で思考力をはぐくむための授業実践が試行された。生徒が「深く考える」ことができるようにさまざまな工夫が各教科で見られたが、その共通する点は、「目的を明確にした対話活動」（図 11）の 2 つの視点にまとめられた。

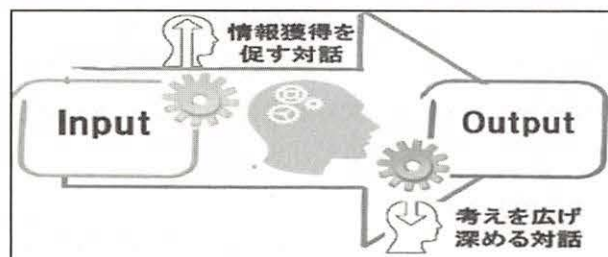


図 11 目的を明確にした対話活動

1 つ目は、教師からの「それは本当ですか？」「他にはないのですか？」など、見方や判断をゆさぶる「情報獲得を促す対話活動」。2 つ目に、子どもどうしの課題解決のプロセスを通して「考えを広げ深める対話活動」である。

また、各教科の実践から、深く考えた結果は、それを外化した成果物に現れることがわかり、生徒の思考を見とるためのアウトプット活動の重要性（図 12）が指摘された。

○アウトプットする活動は、「思考する」必然性・必要性が出てくる。
 ○アウトプットした結果こそ、躓きや誤概念を訂正する場面につなげられる。
 ○深く考え結論付けたのであれば、その答えを自分の言葉・文章で語るはず。

図 12 アウトプット活動の重要性

(2) 研究 2 年次（平成 29 年度）

研究 2 年次は、研究の実践期と位置づけ、研究 1 年次の手応えをもとに実践研究が進められた。その結果、生徒が深く考えるには、学びがいを感ずる文脈（ストーリー性）の学習計画や学び具合を実感できるような振り返り活動の工夫が有効であることが明らかとなった。また、みんなが参加できるような学習活動を通して多様な考えや問いを引き出し、思考ツールを使いながら考えを比較・吟味・統合し、一人ひとりの考えを再構築するような学習展開が効果的であることもみえてきた。

各教科で、年間を通して“深く考える”ために吟味された学習計画や学習内容に即した思考ツールの活用を通して、生徒参加型の授業を行った結果、生徒が主体的に問題解決に挑戦する姿が見られた。主体的な学習過程や習慣は、個々の学習観（学習方略など）などに良い影響を与えることが示唆された。また、各教科で実践した生徒個々のアウトプットの質を高めるアクティブ・ラーニングの実践は、中学校段階の学力学習状況調査の学習状況にも良い結果を与えることも推察された⁽⁷⁾。

一方で、学習上位群と下位群の発表機会への意識の差がみえることから、「授業者は、生徒にアウトプットを求める場面で学習上位群の生徒を中心とした学習展開になっていないか再点検が求められる」ことが課題としてあげられた。

Ⅶ 研究3年次のまとめ

研究3年次の本年度は、2年次で出された課題である学習下位群の学びを念頭におきながら、「一人一人の学びの多様性に応じて子どもの学びを見とり教師の指導改善に生かす評価（指導と評価の一体化）」に主眼をおいて実践研究を進めた。「評価」を通して深く考える生徒をめざす試みである。その成果を下記の4つにまとめる。

(1) 「使える」レベルの評価モデルの作成

「私たちは生徒一人一人に育てたい思考力をきちんと評価できているのだろうか」という視座を念頭に、単元等の学習内容を構造化し、それに適した評価方法の工夫を行い、各教科で「使える」レベルの評価モデル^③の作成に取り組んだ。それは「思考を深める」ことを想定した単元構想や評価計画をたてて、子どもの思考力が発揮される場を設定し（図13）評価する、つまりパフォーマンス課題の効果的な設定やルーブリックを活用した子どもの学びの見とりなどについての実践である。

- 好きな人を効果的にプレゼンする方法は？ [英語]
- 琉大附属中オリジナルトマトの栽培方法を提案しよう [技術]
- 効率の良いバトンパスとは？ [数学]
- 小学生に古典の魅力を伝えよう [国語]
- 幼児の喜ぶ栄養バランスのよいお弁当を作ろう [家庭]

図13 本校でのパフォーマンス課題の例

この実践を繰り返す中で、単元全体でどのような資質・能力をはぐくもうとしているのかを、より意識して単元を構想し、カリキュラムを編成していくことにつながった。

(2) 子どもが自らの学び具合を実感する実践

単元の学習においては「子ども自身が自らの学び具合を実感できるような評価」を念頭に、例えば単元の学びを振り返る時間を複数回設定する、単元の前で自己表現させそれを比較する、単元を通して毎時間の自分の考えを1枚のシートに記述すること（OPPシート等）で自らの学びを自覚するなど、各教科で工夫した実践が行われた。その結果、子どもが自らの学びを実感する場面が増え、それが子どもの「深く考える」に良い影響を与えていることが、多くの教科論の中で確認された。

(3) 「子どもの学びの見とり」から指導へ生かす

私たちは1つの授業の中の評価のあり方にも着目した。学習の成果物からだけの評価ではなく、1時間の授業の中で子どもが何を考え、そこにはどのような学びがあったのか。子どもの思考過程や学びのみとりから授業を見直し、改善を図る「指導と評価の一体化」の試みである。

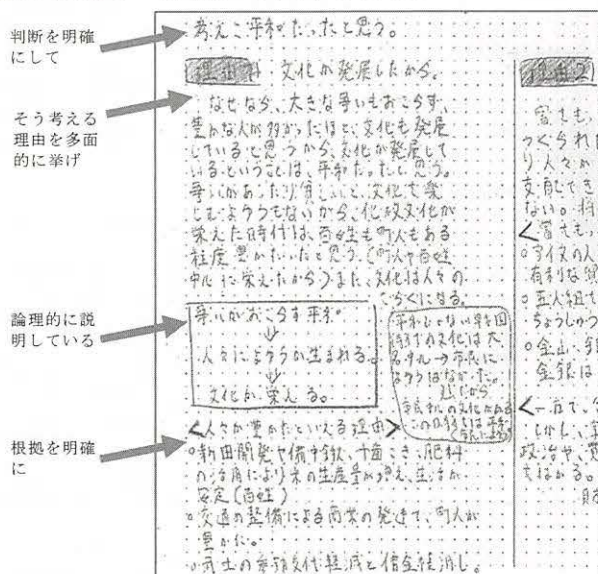


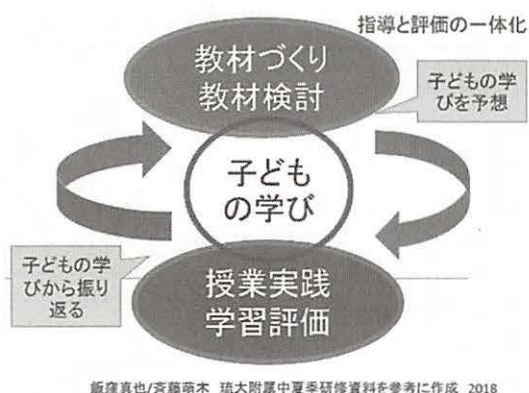
図14 パフォーマンス課題のレポートの記述

図14は、社会科歴史分野で「江戸時代は天下泰平と言われるが、本当に平和だったのか、レポートにまとめなさい」というパフォーマンス課題に取り組む授業での、生徒のレポートの一部である。生徒の記述からは、江戸時代が平和かどうかについての自分の判断を明確にしなが、そう考える理由を多面的に挙げ、論理的に説明しているようすがみられた。一方で、レポートの大部分を教科書の記述を写している生徒がいた。授業者は「この生徒は教科書のどこかに答えがあると考えたのではないかと分析した。つまり「平和か平和ではないか自分の頭で考えて問題を解決して欲しいのに、自分では考えることなく教科書を写してしまっている」と子どもの姿を見とった上で、「まとめなさい」の指示が難易度を上げてしまっていると考えた。問いを「平和だと思うか？ 思わないか？ 友達と話してみよう」に変更することで、一人でも多くの生徒に自分の頭で考えてもらえるように授業改善を図った。子どもの学びの姿から指導へ生かす意識化が、授業を質的に変えているといえ

るだろう。

(4) 「指導と評価の一体化」からみえた授業研究

子どもの学びの見とりから授業改善を進めていく中で、授業研究のあり方についても着目した。飯窪/斉藤は、子どもの学びを想定しての教材づくりや教材案検討、子どもの学ぶ姿からの授業研究の重要性について指摘している⁸⁾。本校の実践研究でも、授業の指導案を、他教科の教員も一緒になってその授業の子どもの学びを予想するところから検討したり、授業研究会ではそれぞれがみたその授業の子どもの学びを語り合うことから始めたりしている。そのイメージ図が図15である。「子どもがどのように学んでいるか」からの授業研究のあり方について、図15のサイクルを意識して回していく実践を重ねていくことで、今後さらに検証・改良されていく必要がある。



飯窪真也/斉藤明木 琉大附属中夏季研修資料を参考に作成 2018

図15 「深く考える」に向かう授業づくり/授業研究

VIII 3年間の研究の総括

本研究3年間の「深く考える」実践が、子どもたちの資質・能力の育成にどのような影響を与えたのかを分析する。

1 データから

(1) 生徒質問紙にみる経年変化

研究初年度の平成28年度から、毎年12月に全国学習状況生徒質問紙による調査を本校独自で全

表2 (質問45)「他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しい」の経年変化

H28	H29	H30
65.0%	62.3%	58.3%

生徒に行っている。質問番号(45)の「自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しい」の項目の経年変化が表2である。毎年在校生(被験者)が3分の1ずつ入れ替わることを考慮しながらデータを分析する必要があるが、数値からは3年間かけて6.7ポイントの改善がみられることが分かった。その背景を探るため、3年間在籍した現3年生の変化に着目する。

(2) 現3年生の3年間の変化

現3年生の全国学力調査結果の小学校段階との比較(H27⇒H30)を通して学習面での変容を考察する。ただし、本学年は小学校から中学校へ上がる段階で70名程度の募集入学を行っており小学校段階と中学校段階では同集団といえない。しかし、本校では入学時に顕著な学力差がつかないように学力検査ではなく面接のみの選抜を行っている。したがって、公募で入学した約70名が附属小学校集団の学習状況と同程度であったとみなして考察を進める。

まず、本校生徒の学習面での伸び具合を見るため、本校生徒の学力調査結果を全国(公)ポイントとの差をとり、小学校段階と中学校段階との比較を行う(図16)。

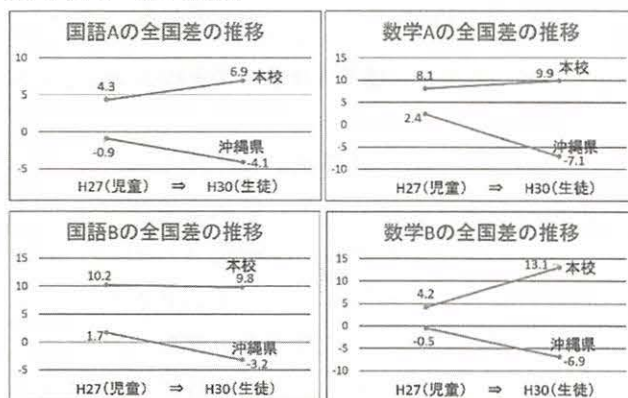


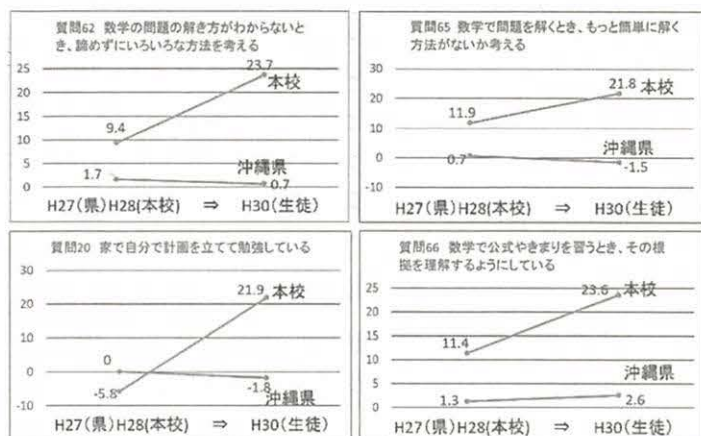
図16 学力調査結果の全国との差の推移

その結果、本校3年生は国語A、数学A、数学Bの調査結果において小学校段階よりも全国との差がプラスに広がっていることが分かった。特に数学Bにおいては、8.9ポイントもプラスに伸びている。国語Bは0.4ポイント全国との差が縮まっているが、誤差の範囲であるといえる。

次に、全国学力調査の生徒質問紙の調査項目を「失敗は成功するためのいい情報(失敗への柔軟

性)」や「考えるプロセスが大事(思考過程重視)」
「自分なりの方略を探す(方略思考)」「暗記ではなく意味を理解する(意味理解思考)」などの市川の学習観⁹⁾に関連づけ、H30年度3年生の本校と沖縄県の学習観の経年変化を追いかけた。次の4つの質問項目についてのH30年の全国(公)ポイントとの差をとり、まとめたのが図17である。

質問項目	
質問 62	数学の問題の解き方がわからないときは、諦めずにいろいろな方法を考えますか。
質問 65	数学の授業で問題を解くとき、もっと簡単に徳方法がないか考えますか。
質問 20	家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか。
質問 66	数学の授業で公式やきまりを習うとき、その根拠を理解するようにしていますか。



注) 本校は H28 (現 3 年生が中 1 の 12 月) と H30 (3 年の 12 月) との比較、
沖縄県は H27 (現 3 年生が小 6 の 4 月) と H30 (3 年の 4 月) との比較

図 17 本校 3 年生と沖縄県 3 年生の学習観の全国との差

図 17 から、全国と沖縄県がほぼ同じ値を示している中で、本校の現 3 年生は、大きくプラスに変化していることがわかる。本研究 3 年間の「深く考える」実践が、本校 3 年生の学習状況や学習観の変容に良い影響を与えたことが推察される。また図 16 と合わせて考えると、本校の学力調査の結果は、「考えるプロセスが大切」や「自分なりのやり方を探す」「暗記ではなく意味を理解する」などの学習観の肯定的な変容に支えられていることが推察される。

(3) 学習状況と学習観のかかわり

次に学習上位群と下位群(それぞれ H29 年度の 1 年生、2 年生各 10 名程度: 下位群は学習状況が「概ね満足」に届かず、学習内容の理解等にも課題があるとみられる生徒から抽出) 別にデータを

集約し、同集団の 1 年間の変化をまとめたのが表 4・表 5 である。

表 4 から、「他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しい」と感じている生徒の割合が減少していることが、学習上位群でも下位群でも同様に確認することができた。一方で、上位群でも半数以上の生徒が、下位群では 7 割以上の生徒が他者に対しての説明が難しいと感じていることもあらためて明らかとなった。

表 4 (質問 45)「他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しい」の経年変化(H29⇒H30)

上位群	55%⇒52%
下位群	74%⇒71%

表 5 学習上位群と下位群の学習観の変化(H29⇒H30)

質問項目 (学習観)		学習上位群% (差)	学習下位群% (差)
質問 62	数学の問題の解き方がわからないとき、諦めずにいろいろな方法を考えますか。	上位群	95⇒96 (+1)
		下位群	78⇒75 (-3)
質問 65	数学の授業で問題を解くとき、もっと簡単に徳方法がないか考えますか。	上位群	82⇒100 (+18)
		下位群	78⇒75 (-3)
質問 20	家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか。	上位群	73⇒83 (+10)
		下位群	35⇒42 (+7)
質問 66	数学の授業で公式やきまりを習うときその根拠を理解するようにしていますか。	上位群	95⇒96 (+1)
		下位群	87⇒75 (-12)

また表 5 から、学習上位群は下位群に比べて、どの質問項目においても高い数値をしめしており、学習状況と学習観の関連性が高いことが示唆された。さらに、この 1 年間の学習観の変化では、下位群にも伸びた項目があった(質問 20)が、全体的には上位群に大きな伸びが見られた。今年度は、下位群の学びを念頭におきながら、「一人ひとりの学びの多様性に応じて子どもの学びを見とり教師の指導改善に生かす(指導と評価の一体化)」に主眼をおいて実践研究を進めてきた。その実践が、学習観の変容に良い影響をもたらしていると推測できるが、同時に下位群の生徒の学習観を変容させることの難しさも私たちに示していると言える

だろう。前述のアウトプットの重要性(図12)を考えたとき、教室の中ですべての生徒が安心してアウトプットできるような学習観の変容が必要であり、そのような授業づくり・集団づくりが求められている⁷⁾。学習下位群の生徒の学習観に大きな変容がないのはなぜか。そのための授業づくりや集団づくりがあらためて問われている。

2 研究の成果

3年間の研究の成果を以下にまとめる。

- 「深く考える」ための学習指導のあり方について、各教科で単元構成や振り返り活動の工夫、目的を明確にした対話活動や思考ツールを活用しての考えを再構成する学習展開、アウトプットの質を高めるアクティブ・ラーニングによる授業改善など、さまざまな角度からアプローチすることで、生徒がよりよい解決に向けて自分の頭で考え、主体的に学ぶ姿が見られた。またそれが、子どもたちの学習状況や学習観に良い影響を与えていることが推察された。本校の捉える7つの構成要素からなる21世紀型思考力が、各教科の実践の中で総合的に鍛えられ、育成される手がかりを得ることができた。
- 「子どもの学びの見とり」からの授業改善(指導と評価の一体化)が定着し、深化することで、授業の質的な改善が図られた。

3 みえてきた課題と今後の展望

3年間の研究から見えてきた課題と今後の展望を以下にまとめる。

- 各教科で「使える」レベルの評価モデルの作成に取り組んだが、子どもがアウトプットした成果物や授業での様子から、子どもの学びをどのように見とっていくとよいかについては、これからも実践研究が必要である。
- 「子ども自身が自分の学び具合を実感する評価」 「学習の意義や価値が実感できる評価」にも各教科で取り組んだが、それが他者と協調的に学び合いながら進めていく「深く考える」学習活動とどのようにつながっているか等についても、その有用性が大きく予想できる。そのよう

な評価も視野に入れた実践研究を進める必要がある。

- 学習下位群の学習観を変容させることの難しさがある。すべての生徒に安心して「深く考える」状況を設定することができていたのか、すべての生徒が豊かな学びに参加できる学習指導とはどのようなものなのか、「子どもがどのように学んでいるか」の視点から模索していく必要がある。

引用・参考文献

- (1)次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ(素案)のポイント、文部科学省
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryu/1375316.htm) 2016.10.17 取得
- (2)平成28年度 第1回沖縄県総合教育会議、総務部 総務私学課
(<http://www.pref.okinawa.lg.jp/site/somu/somushi/shigaku/sougoukyouiku8.html>) 2016.10.17 取得
- (3)石井英真「今求められる学力と学びとはーコンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影ー」日本標準ブックレット No.14、2015年、p.55-74
- (4)国立教育政策研究所「資質・能力 理論編」東洋館出版社、2016年、p.191-p.198
- (5)琉球大学教育学部附属中学校 『研究紀要』第28集、2016年、p.20-21
- (6)中央教育審議会教育課程企画特別部会 論点整理について、文部科学省
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/sonota/1361117.htm)、2016.10.17 取得
- (7)琉球大学教育学部附属中学校 『研究紀要』第30集、2018年、p.6-8
- (8)飯窪真也・齋藤萌木 琉大附属中学校夏季研修資料、2018年、東京大学 大学発教育支援ワークショップ推進機構
- (9)市川伸一「心理学から学習をみなおす」岩波新書、1998年、p.93-100